

日本のオペラ公演2015

—公演データの分析とその考察—

昭和音楽大学オペラ研究所・石田麻子

1. はじめに

1-1. A表（大規模会場での公演）とB表（中・小規模会場での公演）、C表（演奏会形式等の公演）の区分【表1】

本稿で、日本のオペラ公演の開催状況を、数字で分析する手法を継続している。今年も、分析の方向はそのままに、数字からみた日本のオペラ公演の分析とその考察を進めてみたい。

ここでは全幕実施されたオペラ公演のうち、756席以上の大規模会場での公演をA表に、756席未満の中・小規模会場での公演をB表に、それぞれ区分している。大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスの客席数である756席を基準としたのは例年通りである。オペラ劇場としての機能を備えた同ホールは、一定規模の公演を実施するために必要な条件を備えていると考え、比較的大型の公演とそれ以外のものを便宜的に分けるために、『日本のオペラ年鑑』編纂委員会での検討を経て、設けた基準である。ただし、学校の体育館などでの公演は、オペラ公演や演奏会開催を主目的としない会場であり、これらは座席数にかかわらず中・小規模公演に分類している。

また、演奏会形式・ハイライト公演など、通常の上演形式とは異なる公演形態のものをC表として、巻末の資料編に掲載しているの

も例年どおりである。このC表公演に関する言及を、「6. 演奏会形式など」の項で行っている。

1-2. 国内団体、教育研究団体、海外団体の分類について

（分類について）

オペラ団体のみならず、劇場等による公演、大学等の教育機関の学生等が自主的に行う公演、団体や劇場間の共同制作公演等は「国内団体公演」に、大学主催の教育研究発表を目的とした公演、団体や劇場・音楽堂等付属の研修所等の発表公演は「教育研究団体公演」に、海外の歌劇場や団体等の来日公演は「海外団体公演」に分類している。

従って、「国内団体」の研修所公演は、「教育研究団体」とした。例えば、新国立劇場公演は「国内団体」であるが、新国立劇場オペラ研修所公演は「教育研究団体」に分類するなどである。

（団体数について）

一つの団体が他団体と共同制作などを実施した場合は、その団体が単独で実施した場合は区別し、別の1団体としてカウントしている。また、同じホールであっても協働先が変わり、制作体制が異なる場合などは、別組織としてカウントした。

表1 分析対象と上演団体の区分（○は本稿での分析対象、巻末に公演表を掲載）

	1. 国内団体	2. 教育研究団体	3. 海外団体
A表：大規模会場公演＝756席以上の客席数	○	○	○
B表：中・小規模会場公演＝756席未満の客席数	○	○	○
C表：演奏会形式等	分析記事のみ（6. 演奏会形式など）		

2. 日本のオペラ公演2015年

2-1. 総上演回数と活動団体数の推移【図1、表2、図2】

2015年は、毎年分析対象としているA表とB表をあわせた総上演回数が1,125回となり、1,061回だった2014年の数字よりも増え、2013年の1,139回に近づく水準に戻った。ただ、ここ数年は毎年増減を繰り返しているものの、総上演回数は、ほぼ1,100回前後で推移していると言ってよい。また、2014年に上演活動を行った団体数は283団体、2015年には273団体となり、急に増加した2013年の312団体に比べ、さらに減った。結果として、1団体あたりの上演数が増加していることが読み取れる。

大規模会場での公演は、2014年の444回から2015年には505回へと増え、中・小規模

会場は、2014年の617回から2015年は620回とほぼ同数となった。日本各地のオペラ団体や劇場・音楽堂等を含む国内団体に関しては、2014年は254団体による942回だったのが、2015年は240団体による991回と公演回数が大幅に増加している。A表に分類された各地の劇場やオペラ団体等の国内団体が継続的に実施する大規模な公演は、前2014年の353回に比べて46回増、中・小規模公演が2014年の589回に比べて3回増で、国内団体による大規模な公演活動が、前年に比べて活発になっている。

教育研究団体は、2014年は24団体による57回、2015年は24団体による66回で回数は微増となった。教育研究団体は、芸術系大学、劇場や団体の研修所などによる公演分類

図1 総上演回数と活動団体数の推移

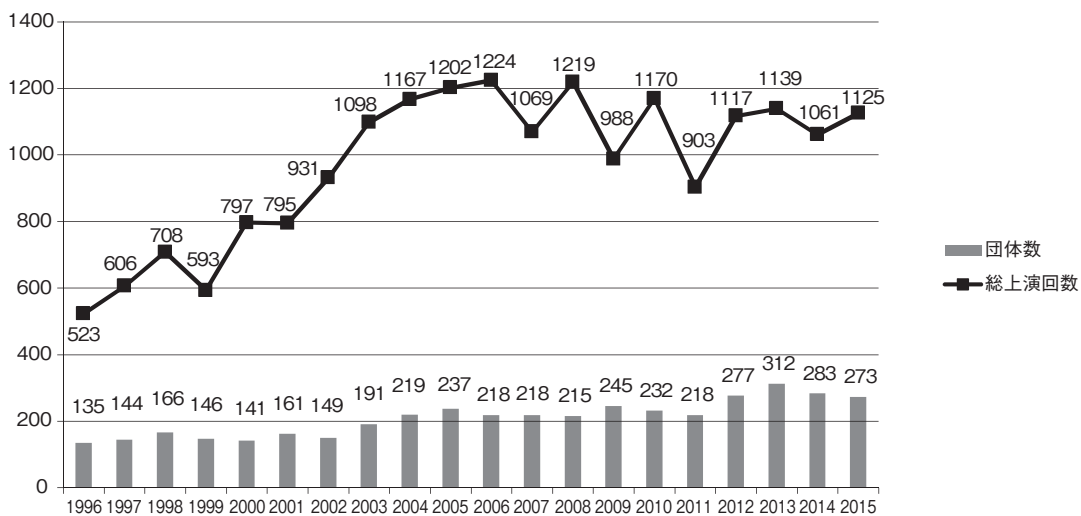
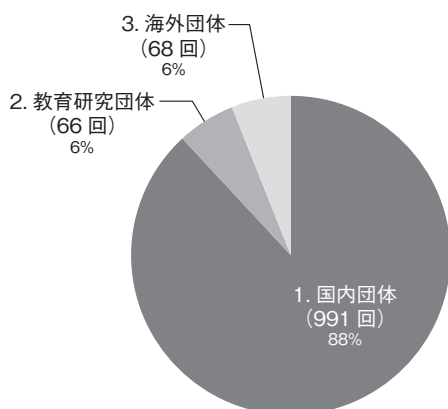


表2 2015年のカテゴリー別オペラ上演団体活動状況一覧

A. 大規模会場 (756席以上)			B. 中・小規模会場 (756席未満)			合計 (A + B)		
カテゴリー	団体数	総上演回数	カテゴリー	団体数	総上演回数	カテゴリー	団体数*	総上演回数
1.国内団体	106	399	1.国内団体	151	592	1.国内団体	240	991
2.教育研究団体	13	41	2.教育研究団体	12	25	2.教育研究団体	24	66
3.海外団体	8	65	3.海外団体	1	3	3.海外団体	9	68
合計/総団体数・総上演回数	127	505/1125	合計/総団体数・総上演回数	164	620/1125	合計	273	1125

*団体数の合計は、A表とB表をあわせて再度集計したものの、同一の団体が規模の異なる会場で公演した場合もあるため、A表とB表を合計した数よりも少なくなる。

図2 各カテゴリーの総上演回数が全体に占める割合



で、例年、上演回数は横ばいである。

海外団体は、2014年は5団体で62回と、2010年が10団体で126回公演だったのが、2011年に東日本大震災をきっかけに激減して以降、減少したままの状況が続いている。2015年の来日団体は9団体に戻したが、上演回数はさほど増えず68回となった。

2015年は、大型の来日公演が少なく、また「巡回型」公演も震災後の減少傾向から戻していないことが影響している。

2-2. 国内団体公演【表3、表4-1、表4-2】

表3は、2015年に大規模会場で10回以上の公演を実施した国内団体の活動についてまとめたものである。

例年、国内の大規模な公演を行う団体の中でも、最多の公演数を確保してきた東京二期会は、前年に引き続き大規模な公演を実施、《リゴレット》《オテロ》《ジュリオ・チェーザレ》《魔笛》《ダナエの愛》《ウィーン気質》を取り上げ、2015年の総上演回数は24回と、前2014年の16回から増加した。《リゴレット》は、東京文化会館での4回公演に加え、大分県のiichiko総合文化センターグランシアタで1回の計5回公演となった。さ

らに、神奈川県民ホールとびわ湖ホールに東京二期会が関わって行われている共同制作公演は、《オテロ》が両ホールで2回ずつ、さらにiichiko総合文化センターグランシアタで1回の、計5回公演が行われた。《魔笛》も東京文化会館での4回公演に加え、鳥取県立倉吉未来中心大ホールで1回公演を行って計5回公演となるなど、公演開催地を拡大したことが公演数の増加に影響している。

近年の東京二期会は、公演制作のうえでの組織間連携が目立つのだが、2015年は、他舞台芸術ジャンルの演出を手掛ける人材が、オペラ公演に関わったケースが多くみられたのも特徴である。《魔笛》を演出した宮本亜門はミュージカル、《ダナエの愛》の深作健太は映画からの起用である。《ウィーン気質》の荻田浩一は、宝塚歌劇団で10年間演出を手掛け、退団後はミュージカルやストレート・プレイを演出している人材。それぞれ生きたオペラ演出が実現して、世界的な傾向でもある、異なるジャンルのアーティストの演出によるオペラ作品上演が、意識的に行われた格好だ。

日本オペラ振興会には、藤原歌劇団と日本オペラ協会の2つのオペラ団体がある。そのうち、藤原歌劇団は、アルベルト・ゼツダ指揮で《ファルスタッフ》を2回、「川崎・しんゆり芸術祭 2015 Arte Ricca しんゆり」で《ラ・トラヴィアータ〜椿姫〜》を2回、アルベルト・ゼツダの指揮による《ランスへの旅》を4回、栗国淳演出で《仮面舞踏会》を2回。この他、宮崎で《蝶々夫人》、香川で《愛の妙薬》を各1回、合計で12回の公演を実施した。さらに日本オペラ協会は、「日本オペラシリーズNo.75」として《袈裟と盛遠》を2回公演した。

日生劇場は、「ニッセイ名作シリーズ 2015」で、《ヘンゼルとグレーテル》を自らの劇場で5回（6月15日～19日）の後、神戸（6月25日）、会津若松（7月10日）、新潟

(7月16日)、鹿児島(9月8日)、名古屋(9月18・19日)で合計11回。これらは中学生や高校生を招待してのもので、各地で鑑賞機会を提供している。同じく「ニッセイ名作シリーズ2015」として、《ドン・ジョヴァンニ》を学校公演3回、「NISSAY OPERA 2015」として一般公演2回の計5回公演を行った。

また、藤原歌劇団、大阪国際フェスティバル他との共同制作による《ランスへの旅》を自らの劇場で上演するなど、上演拠点と制作組織の2つの役割を大きく担っている。

びわ湖ホールは、大ホールで《オテロ》を2回(プロジェクト全体では5回)、中ホールで沼尻竜典作曲の《竹取物語》を2回、《ルサル

表3 2015年の国内団体公演活動データ*1

団体名	上演作品	A.大規模会場		B.中・小規模会場		合計
		上演回数	総上演回数	上演回数	総上演回数	
オペラシアターこんにゃく座	魔法の笛	0	71	12	140	211
	おぐりとてくて	4		2		
	銀の口バ	7		31		
	ネズミの涙	20		9		
	白墨の輪	0		5		
	ピノッキオ	8		28		
	口はロボットの口	23		17		
	森は生きている	9		36		
東京二期会	リゴレット	5	24	0	0	24
	オテロ*2	5				
	ジューリオ・チェーザレ	2				
	魔笛	5				
	ダナエの愛	3				
	ウィーン気質	4				
日生劇場	ヘンゼルとグレーテル*3	11	20	0	0	20
	ランスへの旅*4	4				
	ドン・ジョヴァンニ	5				
びわ湖ホール	天国と地獄	2	12	0	3	15
	オテロ*2	5				
	竹取物語	2		3		
	泣いた赤鬼	1				
	ルサルカ	2				
藤原歌劇団*5	ファルスタッフ	2	14	0	0	14
	蝶々夫人	1				
	ラ・トラヴィアータ～椿姫～	2				
	ランスへの旅*4	4				
	愛の妙薬	1				
	仮面舞踏会	2				
日本オペラ協会	袈裟と盛遠	2				
金沢芸術創造財団／兵庫県立芸術文化センター／高松市文化芸術財団／ミュゼ川崎シンフォニーホール／東京芸術劇場／山形市都市振興公社／名取市文化振興財団／宮崎県立芸術劇場／熊本県立劇場他（共同制作事業）	フィガロの結婚	14	14	0	0	14
兵庫県立芸術文化センター	藤戸	2	12	0	0	12
	椿姫	10				
上位7団体合計上演回数／総上演回数		—	167/505	—	143/620	310/1125

*1 大規模会場で10回以上の上演をしている団体。大規模会場での総上演回数の合計順。共催公演、共同制作公演を含む。

*2 《オテロ》は、複数の劇場や団体等の共同制作公演。びわ湖ホールと東京二期会の各5回は同じプロダクション。

*3 日生劇場は、《ヘンゼルとグレーテル》を、自劇場のほかに、神戸、会津若松、新潟、鹿児島で各1回ずつ、名古屋では2回公演している。

*4 《ランスへの旅》は、複数の劇場や団体等の共同制作公演で、日生劇場と藤原歌劇団の各4回は同じプロダクション。

*5 藤原歌劇団と日本オペラ協会は、(公財)日本オペラ振興会として、同一組織にあるオペラ団体。そのため、1団体として数えた。

表 4-1 2015 年新国立劇場主催のオペラ公演（新国立劇場オペラパレスおよび中劇場プレイハウス：A. 大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
1 月	さまよえるオランダ人	R. ワーグナー	5	2014/2015 シーズンオペラ 《さまよえるオランダ人》	全3幕 / 字幕付原語上演
1～2月	こうもり	J. シュトラウス	5	2014/2015 シーズンオペラ 《こうもり》	全3幕 / 字幕付原語上演
3 月	マノン・レスコー	G. プッチーニ	5	2014/2015 シーズンオペラ 《マノン・レスコー》	新制作 / 全4幕 / 字幕付 原語上演 ベルリン・ドイツ・オ ペラの協力による上演
4 月	運命の力	G. ヴェルディ	5	2014/2015 シーズンオペラ 《運命の力》	全4幕 / 字幕付原語上演
5 月	椿姫	G. ヴェルディ	6	2014/2015 シーズンオペラ 《椿姫》	新制作 / 全3幕 / 字幕付 原語上演
5～6月	ばらの騎士	R. シュトラウス	5	2014/2015 シーズンオペラ 《ばらの騎士》	全3幕 / 字幕付原語上演
6 月	沈黙	松村禎三	4	2014/2015 シーズンオペラ 《沈黙》	全2幕 / 字幕付日本語上演
7 月	蝶々夫人	G. プッチーニ	6	平成27年度 新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室 《蝶々夫人》	全2幕 / 字幕付原語上演
7 月	いのち	錦かよ子	2	平成27年度文化庁文化芸術によ る地域活性化・国際発信推進事業 平成27年度新国立劇場地域招聘 公演 長崎県オペラ協会《いのち》	全3幕 / 字幕付日本語上 演 主催：長崎県 / オペ ラ「いのち」公演実行 委員会 / (公財) 新国立劇 場運営財団 中劇場（プ レイハウス）
10 月	楽劇「ニーベルングの 指環」序夜 ラインの黄金	R. ワーグナー	6	平成27年度（第70回）文化庁芸 術祭オープニング・オペラ公演 2015/2016 シーズン オープ ニング公演《ラインの黄金》	新制作 / 全1幕 / 字幕付 原語上演 フィンランド国立歌劇 場（ヘルシンキ）の協力 による上演
11 月	トスカ	G. プッチーニ	5	平成27年度（第70回）文化庁 芸術祭協賛公演 2015/2016 シーズンオペラ《トスカ》	全3幕 / 字幕付原語上演
12 月	ファルスタッフ	G. ヴェルディ	4	2015/2016 シーズンオペラ 《ファルスタッフ》	全3幕 / 字幕付原語上演
—	12 作品	7 人	58/505	—	—

表 4-2 2015 年新国立劇場主催のオペラ公演（他会場での公演：A. 大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
10 月	蝶々夫人	G. プッチーニ	2	平成27年度 新国立劇場 高 校生のためのオペラ鑑賞教室・ 関西公演《蝶々夫人》 平成27 年度文化庁文化芸術による地域 活性化・国際発信推進事業	全2幕 / 字幕付原語上演 主催：尼崎市 / (公財) 尼 崎市総合文化センター / 新国立劇場 会場：あま しんアルカイクホール 普及公演事業
—	1 作品	1 人	2/505	—	—

カ》を2回公演した。加えて、《天国と地獄》を「平成26年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業 地域大連携オペラ創造プロジェクト」として、地域の大学等と連携の上2回公演実施、びわ湖ホール声楽アンサンブルのメンバーを積極的に起用する事業展開とした。

兵庫県立芸術文化センターは、「兵庫県立芸術文化センター開館10周年記念公演 佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2015」で、《椿姫》を新制作により10回上演、さらに尾上和彦作曲の《藤戸》を新制作で2回公演実施、日本のオペラ作品シリーズ上演を継続している。

オペラシアターこんにゃく座は、例年200回を超える公演を全国各地津々浦々で行っており、2015年も211回となった（こんにゃく座オペラ塾の修了公演として実施された《SMILE》2回公演を除く）。

このほか、表3には含まれないが、文化庁の「文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）」の助成を受けて実施された大規模な公演には、関西二期会の《夕鶴》と《アンドレア・シェニエ》、《ウィンザーの陽気な女房たち》、堺シティオペラによる《カルメン》がある。さらに、東京オペラ・プロデュースが続けている海外作品の日本初演シリーズでは、E. ヴォルフ＝フェッラーリ作曲の《シンデレラ》とF. アルファード作曲の《復活》が実施された。

さらに、神奈川県民ホールは、一柳慧作曲の《水炎伝説》を小ホールで2回、および黛敏郎作曲の《金閣寺》を大ホールで2回上演した。神奈川県民ホールとびわ湖ホールとの共同制作による《オテロ》も2回上演。加えて、同じ財団が指定管理を受けている神奈川県立音楽堂は《メッセニアの神託》を制作、ファビオ・ビオンディが率いるエウローパ・ガランテとソリストたちが来日して、彌勒忠史演出により2回上演された。1954年に開館

した歴史あるホールでの公演ながら、LED照明を使用するなどの工夫がなされている。

新国立劇場の主催公演のうち、新制作は3つのプロダクション。3月にブッチーニ作曲《マノン・レスコー》を新制作して5回上演、5月に《椿姫》を6回、さらに2015/2016シーズンのオープニングとして、10月に楽劇「ニーベルングの指環・序夜」《ラインの黄金》を6回上演した。このうち、《マノン・レスコー》はベルリン・ドイツ・オペラ、《ラインの黄金》はフィンランド国立歌劇場のプロダクションで、それぞれ上演実績のあるもの。

新国立劇場が「高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演」として実施した兵庫県尼崎市での《蝶々夫人》は、2回の公演が、あましんアルカイックホールで行われた。公演回数に限られてしまうことは残念だが、東京の劇場以外での鑑賞の場を設ける貴重な機会である。

2015年、新国立劇場が上演したオペラの中でも特徴あるものの一つに、長崎県オペラ協会のプロダクションを地域招聘公演としてとりあげた、錦かよ子作曲の《いのち》があげられる。戦争とそれに巻き込まれる人々をテーマとした作品を、戦後70年の2015年に、オペラが上演される「今日的意味」を伴って再度上演されたのは意義深い。

2-3. 教育研究団体公演【表5】

教育研究団体の公演は、2014年が57回、2015年は66回とわずかに増加した。各地の芸術系大学を中心に、その他にも劇場やオペラ団体が運営する研修所などが、教育成果、あるいは途中経過を披露する発表会として、定期的に公演を実施している。

教育研究団体公演で取り上げられる作品は、学生や卒業生など若い歌手たちが出演することもある。モーツァルトのアンサンブル作品を上演する傾向が強いことも例年どお

りである。

2015年、新国立劇場オペラ研修所が実施したロッシーニの《結婚手形》と《なりゆき泥棒》の2作品の公演において、同研修所で研修中の歌手達が、それぞれの声の準備状況とうまくマッチした役柄を得て、成果をあげていたことが特筆される。

また、昭和音楽大学は中国・上海音楽学院との国際共同制作により《フィガロの結婚》を日本と中国で合計4回上演した。いずれもマルコ・ガンディーニの演出で、10月の2公演はムーハイ・タンの指揮によりテアトロ・ジューリオ・ショウワで2回上演、そののち12月には、中国・上海市にある上海東方芸術中心で、張誠杰の指揮により、2回の上演を行った。日本公演では、日本人歌手たちに加えて、中国人歌手が4人キャスティングされ、短い期間に両国で上演を重ねたことで、日中の若い人材の経験値が一気に上がった様子が見てとれた。

2-4. 海外団体公演【表6、図3】

海外団体公演は、2010年に126回行われ

ていたのが、2011年の東日本大震災の影響を受けた結果、73回へと激減して以来、上演回数の点では回復していない。その状況は2015年も続いた。

2015年に行われた9団体の公演68回のうち、英国ロイヤル・オペラが「拠点型」公演（4都市以下での公演）を8回行った。

「巡回型」公演（5都市以上での公演）では、ブルガリア国立歌劇場が、6回の全幕上演と、3回の演奏会形式での上演により、結果として8都市で「巡回型」公演を行った。この他、ハンガリー国立歌劇場が《セビリアの理髪師》を5都市（東京文化会館は東京23区、武蔵野市民文化会館は武蔵野市で、別都市として計算）、《フィガロの結婚》を8都市で、合計14回公演、ポーランド国立ワルシャワ室内歌劇場10回公演、プラハ国立歌劇場が15都市で18回の公演を実施。海外団体による公演は、こうした「巡回型」公演の結果、2015年は36都市（23都道府県）で行われていて、日本の各地域において広くオペラ鑑賞機会を提供しているのは、2015年も同様である。

この他、12月に上演された《王子とクリ

表5 2015年の教育研究団体公演活動データ*1

団体名	作品名	作曲家名	A.大規模会場		B.中・小規模会場		合計
			上演回数	総上演回数	上演回数	総上演回数	
新国立劇場 オペラ研修所	結婚手形	G.ロッシーニ	3	6	0	0	6
	なりゆき泥棒	G.ロッシーニ	3				
武蔵野音楽大学	ふしぎな魔法の笛*2	W.A.モーツァルト	4	5	0	0	5
	コジ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	1				
昭和音楽大学*3	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	4 (2)	4 (2)	0	0	4 (2)
洗足学園音楽大学	魔笛	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	4
	ラ・ボエーム	G.プッチーニ	2	2	0	0	
焼津中央高等学校 合唱部	仮面舞踏会	G.ヴェルディ	4	4	0	0	4
愛知県立芸術大学	コシ・ファン・トゥッテ ～女はみんなこうしたもの～	W.A.モーツァルト	3	3	0	0	3
国立音楽大学	フィレンツェの麦わら帽子	N.ロータ	1	3	0	0	3
	コジ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	2				
7団体合計上演回数 ／総上演回数	8作品	5人	—	29(27)/505	—	0	29(27)/1125

*1 大規模会場で、教育研究型公演の開催実績が3回以上ある団体。大規模会場での総上演回数順、合計および50音順の掲載。学生主催公演やゼミ単位など有志による公演などは含めていない。

*2 武蔵野音楽大学附属江古田音楽教室主催公演。

*3 4回公演のうち2回は上海東方音楽中心（中国）での上演。

スマス》は、^{イ・ゴニョン}李建鏞作曲による韓国・ソウル市青少年少女合唱団出演のオペラ作品で、韓国国内では既に何度も上演されている。現代のソウルに住む子どもが、夢の中で（タイムスリップして）見た出来事という設定で描かれた歴史の記録でもある。重くなりがちな戦争の時代描写を、韓国の青少年少女合唱団が歌い演じ、生き生きと描き出した。

3. 指揮者と演出家

（指揮者）

2015年に登場した指揮者は、国内外あわせて202人。大規模会場での公演活動が中心となった指揮者は、以下のとおりである。井上道義が《フィガロの結婚》で14回、時任康文が「ニッセイ名作シリーズ2015」の《ヘンゼルとグレーテル》ほかで13回、飯守泰次郎が新国立劇場の《さまよえるオランダ人》5

回と《ラインの黄金》6回で合計11回の公演を振った。さらに、佐渡裕が兵庫県立芸術文化センター《椿姫》で10回、飯坂純が東京オペラ・プロデュースの公演などで、大規模会場での公演が9回、中・小規模会場で3回の合計12回となった。イヴ・アベルは、新国立劇場の《椿姫》6回と《ファルスタッフ》4回を指揮した結果、合計で10回振っている。

この他、下野竜也が、新国立劇場の《沈黙》4回、大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスで2回、さらに神奈川県民ホール《金閣寺》の2回をあわせて8回、現田茂夫が、「錦織健プロデュース・オペラ vol.6」《後宮からの逃走》で8回、沼尻竜典が、《オテロ》5回と《竹取物語》2回で7回、河原忠之が、新国立劇場研修所公演他で7回などとなった。「巡回型」公演の指揮者では、アーツカンパニー公演で佐々木克仁が29回振っている。

表6-1 2015年海外団体*1の公演活動データ（A.大規模会場）

形態*2	上演月	国名	劇場名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計/総上演回数	開催都市数
巡回	6月	ハンガリー	ハンガリー国立歌劇場	セビリアの理髪師	G. ロッシーニ	5	14	5
				フィガロの結婚	W.A. モーツァルト	9		8
その他	9月	オーストリア	メルビッシェ湖上音楽祭	こうもり	J. シュトラウス	5	5	4
拠点	9月	イギリス	英国ロイヤル・オペラ	マクベス	G. ヴェルディ	4	8	1
				ドン・ジョヴァンニ	W.A. モーツァルト	4		2
その他	9月	イタリア	ボローニャ歌劇場 フィルハーモニー	道化師	R. レオンカヴァッロ	3	3	2
巡回	10月	ポーランド	ポーランド国立ワルシャワ室内歌劇場	魔笛	W.A. モーツァルト	7	10	6
				フィガロの結婚	W.A. モーツァルト	3		2
巡回	10月	ブルガリア	ブルガリア国立歌劇場	トゥーランドット	G. プッチーニ	3	6	3
				イーゴリ公	A. ボロディン	3		3
巡回	10~11月	チェコ	プラハ国立歌劇場	椿姫	G. ヴェルディ	18	18	15
その他	12月	韓国	ソウル市青少年少女合唱団	王子とクリスマス	李 建鏞	1	1	1
—		8ヶ国	8団体	11作品	8人	65	65/505	36都市

表6-2 2015年海外団体*2の公演活動データ（B.中・小規模会場）

形態	上演月	国名	劇場名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計/総上演回数	開催都市
その他	10月	ノルウェー	グルソムヘテン劇団	山の鳥	P. サンデ	3	3	1
—		1ヶ国	1団体	1作品	1人	3	3/620	1都市

*1 劇場名は、主催者表記に準じる。

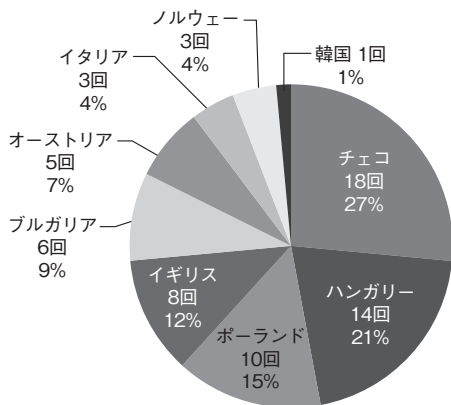
*2 形態は以下のように分類している。

「拠点型」：1回の来日で、4都市（市を1単位とする。東京23区は1都市とする）以下での公演。

「巡回型」：1回の来日で、5都市以上で公演（今回のブルガリア国立歌劇場は、演奏会形式での3公演を含めると8都市での公演）。

「その他」：音楽祭、合唱団等芸術団体による公演等。

図3 2015年海外団体の公演（全68回）・所属国別割合



海外招聘オペラ公演のうち、「拠点型」公演の指揮者では、アントニオ・パッパーノが、音楽監督を務める英国ロイヤル・オペラの日本公演で、《マクベス》4回と《ドン・ジョヴァンニ》を4回の合計8回振った。

このほか、「巡回型」公演では、ブラハ国立歌劇場オペラ公演で、マルティン・レグヌスが、《椿姫》を振って18回となったのを筆頭に、ルベン・シルヴァが、ポーランド国立ワルシャワ室内歌劇場公演の《魔笛》7回と《フィガロの結婚》3回を振って合計10回となった。

（演出家）

2015年、演出家は193人および団体（含む団体）となった。この数字には共同演出をした者を含め、再演演出家は含めていない。1つの演出を全国各地で上演しているオペラシアターこんにゃく座公演のようなものもあって、中・小規模会場での公演には、演出家を置かずに行われているものも多数ある。

演出回数の点では、野田秀樹が、《フィガロの結婚》1演目を全国の大規模会場で行い、総上演回数14回を数えた。中村敬一が、関西以西を拠点とする団体（びわ湖ホール、大阪音楽大学、関西二期会、沖縄オペラ協会ほ

か）などの演出で、それぞれ大規模会場14回、中・小規模会場9回で合計23回と最多となった。栗国淳は、藤原歌劇団の《ファルス・スタッフ》《仮面舞踏会》等を演出して、大規模会場で合計13回、岩田達宗は、藤原歌劇団の《ラ・トラヴィアータ～椿姫～》ほか、地域の各団体を含めて大規模会場で12回、中・小規模で8回のあわせて20回となった。次いで、直井研二が、大規模会場で10回、中・小規模会場で4回の、あわせて14回、恵川智美が、大規模会場で10回、中・小規模会場でもオペラシアターこんにゃく座公演《銀のロバ》など33回の合計43回となっている。

この他、オペラシアターこんにゃく座の「巡回型」公演を中心とした演出で、鄭義信が《口はロボットの口》や《ネズミの涙》《ピノッキオ》で、大規模会場での公演が43回、中・小規模会場が28回の合計71回となった。同じく、同団所属の大石哲史が、《森は生きている》で、大規模会場で9回、中・小規模会場が36回の合計45回と回数を重ねている。

4. オペラ作品と作曲家【表7】

2015年は、海外の作品の上演回数が690回となり、2014年の607回から大きく数字を増やした。日本の作品の上演回数は、2012年以降、微減傾向が続いていて、2015年は前2014年の454回から435回へと、さらに減少した。海外の作品は2014年の87作品、2015年には89作品へとほぼ横ばいで、1作品あたりの公演数が増えたことがわかる。一方で、日本の作品は、2015年は2014年の84作品と同数だったので、結果として1作品あたりの公演数が減ったことになる。

4-1. 海外のオペラ作品と作曲家【表8-1、表8-2】

海外の作曲家によるオペラ作品のリストをみると、2015年は、《魔笛》が55回で1位になった。東京二期会、ポーランド国立ワル

表7 2015年 オペラ作品、作曲家別の上演回数

	海外の作品			日本の作品			合計		
	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	総上演回数
2004年	49人	99作品	753回	43人	61作品	414回	92人	160作品	1167回
2005年	57人	111作品	826回	50人	60作品	376回	107人	171作品	1202回
2006年	47人	100作品	800回	50人	71作品	424回	97人	171作品	1224回
2007年	55人	105作品	721回	41(46)人	59作品	352回	96(101)人	164作品	1073回
2008年	50(51)人	107作品	782回	51(52)人	70作品	437回	101(103)人	177作品	1219回
2009年	49(50)人	99作品	653回	48(49)人	48作品	335回	97(99)人	147作品	988回
2010年	42(44)人	86作品	654回	41人	59作品	516回	83(85)人	145作品	1170回
2011年	38人	88作品	530回	34(36)人	51作品	373回	72(74)人	139作品	903回
2012年	51(52)人	97作品	636回	55(56)人	75作品	481回	106(108)人	172作品	1117回
2013年	41(45)人	99作品	675回	56(59)人	83作品	464回	97(104)人	184作品	1139回
2014年	44人	87作品	607回	50(52)人	84作品	454回	94(96)人	171作品	1061回
2015年	44(45)人	89作品	690回	58(61)人	84作品	435回	102(106)人	173作品	1125回

* () 内は、共作者・編曲者等を入れた場合の数字。

表8-1 2015年に日本で上演された海外のオペラ作品

(大規模会場での上演実績のあるもの、全89作品中・上位15作品、タイトルは便宜的に統一)

No.	作品名	作曲家名	A.大規模会場	B.中・小規模会場	合計
1	魔笛	W.A. モーツァルト	29	26	55
2	椿姫	G. ヴェルディ	41	11	52
3	カルメン	G. ビゼー	18	32	50
4	フィガロの結婚	W.A. モーツァルト	39	9	48
5	こうもり	J. シュトラウスⅡ	22	8	30
6	ラ・ボエーム	G. プッチーニ	6	19	25
7	ヘンゼルとグレーテル	E. フンパーディンク	15	5	20
7	メリー・ウィドウ	F. レハール	9	11	20
9	蝶々夫人	G. プッチーニ	15	4	19
10	ドン・ジョヴァンニ	W.A. モーツァルト	11	7	18
11	コジ・ファン・トゥッテ	W.A. モーツァルト	8	8	16
12	子どもと魔法	M. ラヴェル	7	8	15
12	愛の妙薬	G. ドニゼッティ	3	12	15
14	仮面舞踏会	G. ヴェルディ	6	6	12
15	トスカ	G. プッチーニ	5	5	10
合計/ 総上演回数	—	—	234/505	171/620	405/1125

表8-2 2015年に日本で上演された海外の作曲家 (全45人中、上位10人)

No.	作曲家名	上演回数
1	W.A. モーツァルト	152
2	G. ヴェルディ	106
3	G. プッチーニ	81
4	G. ビゼー	50
5	J. シュトラウスⅡ	34
6	G.C. メノッティ	32
7	G. ドニゼッティ	26
7	G. ロッシーニ	26
9	E. フンパーディンク	20
9	F. レハール	20
合計/ 総上演回数	—	547/1125

シャワ室内歌劇場などが大規模会場で、オペラシアターこんにゃく座が中・小規模会場で、それぞれ上演回数を重ねたことが要因である。《椿姫》が52回となったのは、兵庫県立芸術文化センターの10回公演のほか、プラハ国立歌劇場が「巡回型」公演で18回取り上げたなどによる。《カルメン》は、堺シティオペラ、仙台オペラ協会、江東オペラなど、各地域のオペラ団体によってとりあげられて数字を伸ばした。また、《フィガロの結婚》は、全国共同制作プロジェクトの14回公演のほか、ハンガリー国立歌劇場の「巡回型」公演に加えて、ひろしまオペラルネッサンスのほか、東京藝術大学や昭和音楽大学などが取り上げている。

モーツァルト、ヴェルディ、プッチーニが上位を占めるのも例年同様の傾向であるが、2015年はモーツァルトが152回と段違いでトップとなったことが特徴となった。

日本のオペラ作品の上演回数では、A表の大規模会場で公演には、林光、萩京子が、B表の中・小規模会場で公演には、同じく林光、萩京子のほか、井上正志の名前が挙がっている。「巡回型」公演を全国で展開しているオペラシアターこんにゃく座、およびオペレッタ劇団ともしびの上演によるもので占められているのは例年通り。中には、複数の団体がとりあげた作品もあり、林光作曲の《あまんじゃくとうりこひめ》は日本のオペラ作品のレパトリーの一つとして定着した感がある。

日本のオペラ作品の初演リスト（資料篇）でも、複数の作品上演成果を記録している。藤倉大作曲の《ソラリス》は、アンサンブル・アンテルコンタンポランが演奏に加わり、フランス・シャンゼリゼ劇場で、3月5日、7日の2回上演の後、同じくフランス・リール歌劇場で3回、スイス・ローザンヌ歌劇場で2回の上演が行われるなど、3つの歌劇場の共同委嘱による話題の作品となった。

4-2. 日本のオペラ作品と作曲家【表9-1、表9-2】

表9-1 2015年に国内で上演された日本のオペラ作品（A.大規模会場） *大規模会場で、上演回数10回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	口はロボット口	萩 京子	23	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で17回公演あり
2	ネズミの涙	萩 京子	20	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で9回公演あり
3	森は生きている	林 光	10	2	オペラシアターこんにゃく座 /合唱団じゃがいも	中・小規模会場で38回公演あり
合計/総上演回数			53/505	—	—	—

表9-2 2015年に国内で上演された日本のオペラ作品（B.中・小規模会場）

*中・小規模会場で、上演回数20回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	森は生きている	林 光	38	2	オペラシアターこんにゃく座/ 合唱団じゃがいも	大規模会場で10回公演あり
2	金剛山のトラたいじ	井上正志	36	1	オペレッタ劇団ともしび	
3	ピノッキオ	萩 京子	31	2	オペラシアターこんにゃく座/ キラリ☆かげき団	大規模会場で8回公演あり
3	銀の口バ	萩 京子	31	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で7回公演あり
5	あまんじゃくとうりこひめ	林 光	20	3	東京合唱協会/河内長野市文化振興財団/東京室内歌劇場	大規模会場で1回公演あり
合計/総上演回数			156/620	—	—	—

5. 上演地域の分布と会場別データ

【表10、表11、図4、表12-1、表12-2】

上演地域の分布に関する分析では、オペラ公演開催が確認できなかった県の有無が関心の一つとなる。2013年は福井県と宮崎県、2014年は高知県だったのが、2015年は佐賀県での公演が確認できなかった。ただし、佐賀県民オペラ協会によって《椿姫》の公演が1回実施されていて、C表に掲載しているので、まったくオペラ上演が無かったというわけではない。

2015年の上位10位を見ると、首都圏の東京、神奈川、千葉、埼玉が上位を占め、他には大阪、愛知、兵庫、広島が入り、多少の順位の変動はあるものの、ほぼ例年通りの開催状況になった。この他、北海道が8位、長野と岐阜が同数で10位になっている。

東京は、2015年は2014年と同数の424回となり、大きく他を引き離している。東京での公演回数をみると、国内団体による公演数は、2014年は378回で、2015年が376回とほぼ同数。海外団体の上演回数は、2013年は41回だったのが、2014年には一気に26回へ減少して2015年は同数、教育研究団体は2014年が20回だったのが、2015年が22回とほぼ同数である。

毎年のように10位以内に入ってくる都道府県には、人口の多い都市に、大規模な公演が実施されている拠点会場があるという条件が整っている。拠点となる会場では、海外団体の公演、国内のオペラ団体の活動が行われ、さらに音楽大学等の教育機関もあって、演じる「人」や「場所」、観る「人」もいることが特徴である。

表11では、大規模公演、中・小規模公演別の実施状況についてまとめた。佐賀県以外にも、秋田県、高知県で、大規模な全幕上演が行われていないことが見て取れる。ただ、このうち秋田県では、《ヘンゼルとグレーテル》

の演奏会形式での上演が、「アトリオン音楽ホール・コンサートオペラ Vol.2」として1回行われ、オペラの鑑賞機会は劇場事業により確保された。

表12の会場別総上演回数を見てみよう。大規模会場のうち、新国立劇場は、2013年には79回、さらに2014年には84回と増加していたのが、2015年には75回に減少した。一方で、東京文化会館は、2012年は41回、2013年には32回、2014年には改修工事のため、16回と大幅に減少したのが、30回へと数字を戻した。兵庫県立芸術文化センターは、2014年の14回から2015年は17回に増加した。このほかの劇場としては、日生劇場が17回、愛知県芸術劇場が10回など上位を占めた。

さらに今年から、表12には、さらにデータを増やし、各ホールの座席数（ピット設置等の形状は考えず最大の値とした）に公演回数を掛けて合計し、鑑賞可能な数（実際の来場数ではない）を類推している。上位10か所の大規模会場の客席を合計すると、33万席を超える数が提供されたことになる。これに、実際の入場者数、使用した舞台形状による客席数の減少などを勘案して実数を出す必要はあるものの、おおよその目安にはなる。

6. 演奏会形式など

この他、C表に分類された公演、すなわち演奏会形式・コンサート形式での上演の他、部分的にカットして上演されたものを見てみよう。2015年には、こうした公演は339回以上記録されている。この中で大規模な会場で行われているものから、さらにいくつかの点で重要と考えられるものを整理してみたい。

2015年に行われた中で、プロフェッショナルのオーケストラ主催公演（定期演奏会、特別演奏会など）、音楽祭や劇場・音楽堂等主催公演のうち、大規模な公演会場での、全幕（一部抜粋も含む）演奏会形式には、以下

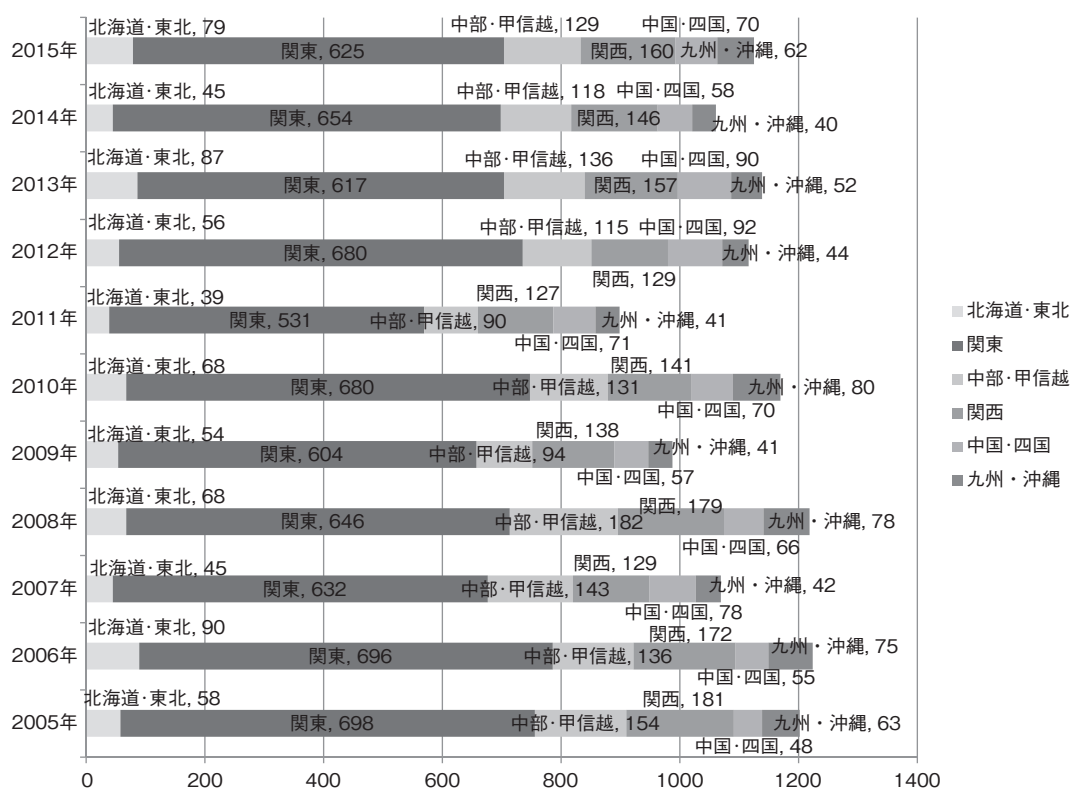
表10 2015年の都道府県別上演回数

No.	都道府県名	国内団体		教育研究団体		海外団体		合計		
		団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	上演回数 順位
1	北海道	7	19	1	2	1	2	9	23	8
2	青森	3	3	0	0	1	1	4	4	37
3	岩手	1	1	0	0	1	1	2	2	42
4	宮城	7	16	0	0	1	1	8	17	15
5	秋田	1	2	0	0	0	0	1	2	42
6	山形	4	11	0	0	0	0	4	11	21
7	福島	4	20	0	0	0	0	4	20	12
8	茨城	5	9	0	0	1	1	6	10	23
9	栃木	4	12	1	2	0	0	5	14	18
10	群馬	4	10	0	0	0	0	4	10	23
11	埼玉	14	41	0	0	2	2	16	43	6
12	千葉	12	33	0	0	0	0	12	33	7
13	東京	94	376	7	22	6	26	107	424	1
14	神奈川	29	70	3	18	3	3	35	91	2
15	新潟	5	10	0	0	0	0	5	10	23
16	富山	2	3	0	0	1	1	3	4	37
17	石川	4	6	0	0	0	0	4	6	32
18	福井	1	3	0	0	0	0	1	3	39
19	山梨	1	1	0	0	1	2	2	3	39
20	長野	5	19	0	0	2	2	7	21	10
21	岐阜	5	21	0	0	0	0	5	21	10
22	静岡	7	7	1	4	1	1	9	12	20
23	愛知	16	37	3	7	5	5	24	49	4
24	三重	3	6	0	0	1	1	4	7	30
25	滋賀	6	18	0	0	0	0	6	18	13
26	京都	7	15	1	1	1	1	9	17	15
27	大阪	17	42	3	4	2	2	22	48	5
28	兵庫	17	42	1	2	5	6	23	50	3
29	奈良	4	9	0	0	0	0	4	9	26
30	和歌山	4	10	0	0	1	1	5	11	21
31	鳥取	2	2	0	0	0	0	2	2	42
32	島根	4	6	0	0	0	0	4	6	32
33	岡山	5	13	1	1	0	0	6	14	18
34	広島	6	19	0	0	3	3	9	22	9
35	山口	1	1	0	0	1	1	2	2	42
36	徳島	3	6	0	0	0	0	3	6	32
37	香川	5	7	0	0	0	0	5	7	30
38	愛媛	4	9	0	0	0	0	4	9	26
39	高知	1	2	0	0	0	0	1	2	42
40	福岡	4	12	0	0	3	3	7	15	17
41	佐賀	0	0	0	0	0	0	0	0	—
42	長崎	2	4	1	1	0	0	3	5	35
43	熊本	3	7	0	0	1	1	4	8	28
44	大分	3	3	1	2	0	0	4	5	35
45	宮崎	3	3	0	0	0	0	3	3	39
46	鹿児島	4	17	0	0	1	1	5	18	13
47	沖縄	3	8	0	0	0	0	3	8	28
合計	—	—	991	—	66	—	68	—	1125	—

表 11 2015年の都道府県別・地域別総計

都道府県名	A.大規模会場		B.中・小規模会場		上演回数比率	地域	
	団体数	上演回数	団体数	上演回数	総上演回数		
北海道	5	7	5	16	7.02 %	北海道・東北	
青 森	3	3	1	1			
岩 手	1	1	1	1			
宮 城	4	5	5	12			
秋 田	0	0	1	2			
山 形	4	10	1	1			
福 島	2	17	3	3			
地域合計	—	43	—	36	79		
茨 城	5	8	1	2	55.56 %	関東	
栃 木	3	8	3	6			
群 馬	3	5	2	5			
埼 玉	8	16	9	27			
千 葉	1	1	11	32			
東 京	44	180	68	244			
神奈川	21	48	14	43			
地域合計	—	266	—	359	625		
新 潟	2	2	3	8	11.47 %	中部・甲信越	
富 山	2	2	1	2			
石 川	3	3	1	3			
福 井	1	1	1	2			
山 梨	2	3	0	0			
長 野	6	20	1	1			
岐 阜	1	2	5	19			
静 岡	5	8	4	4	14.22 %	関西	
愛 知	11	16	14	33			
地域合計	—	57	—	72	129		
三 重	2	2	2	5	14.22 %		関西
滋 賀	3	10	4	8			
京 都	6	8	4	9			
大 阪	11	18	13	30			
兵 庫	12	27	12	23			
奈 良	1	2	4	7			
和歌山	1	1	4	10			
地域合計	—	68	—	92	160		
鳥 取	2	2	0	0	6.22 %	中国・四国	
島 根	3	4	1	2			
岡 山	6	8	1	6			
広 島	7	11	3	11			
山 口	1	1	1	1			
徳 島	2	2	1	4			
香 川	4	5	1	2			
愛 媛	3	6	2	3	5.51 %	九州・沖縄	
高 知	0	0	1	2			
地域合計	—	39	—	31	70		
福 岡	6	8	2	7	5.51 %		九州・沖縄
佐 賀	0	0	0	0			
長 崎	1	2	2	3			
熊 本	4	6	1	2			
大 分	4	5	0	0			
宮 崎	2	2	1	1			
鹿児島	4	5	1	13			
沖 縄	2	4	1	4	5.51 %	九州・沖縄	
地域合計	—	32	—	30			62
合計	—	505	—	620	1125	—	

図4 地域別総上演回数推移（単位・回）



のようなものが挙げられる。

（オーケストラ主催の演奏会形式上演）

まず、「オーケストラの定期演奏会」では、東京フィルハーモニー交響楽団がプレトニョフ指揮によるリムスキー＝コルサコフ作曲《不死身のカッシェイ》、バッティストーニの指揮による《トゥーランドット》を演奏している。さらに、新日本フィルハーモニー交響楽団がデリック・イノウエ指揮により、バルトーク作曲《青ひげ公の城》を演奏しており、読売日本交響楽団がシルヴァン・カンブルラン指揮により《トリスタンとイゾルデ》、シャルル・デュトワがNHK交響楽団と《サロメ》を演奏している。

このほか「特別演奏会」として、仙台フィルハーモニー管弦楽団が《ラ・ボエーム》に

グロー・ベルク指揮で、さらに《椿姫》に山田和樹指揮で取り組んだ。このように、オーケストラが主催、あるいは主体となって上演する演奏会形式の全幕版オペラは、毎年一定数行われている。

（音楽祭や劇場・音楽堂等主催の演奏会形式上演）

「音楽祭や劇場・音楽堂等主催の演奏会形式」による上演に、以下のものが挙げられる。東京・春・音楽祭が、マレク・ヤノフスキ指揮 NHK 交響楽団による演奏で《ワルキューレ》をとりあげ、2014 年の《ラインの黄金》に続いて大きな成果を挙げ、「コンボージアム 2015」では、カイヤ・サーリアホ作曲の《遥かなる愛》演奏会形式上演を東京交響楽団が演奏している。このように、作品の規模が大きかったり、現代作品だったりなどで、

表12-1 2015年の会場別総上演回数（7回以上開催のA.大規模会場、[]内は同一施設内のB.中・小規模会場）

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	上演回数	客席数 ^{*1} (席)	総客席数(席)
1	東京都	新国立劇場オペラ劇場	56	0	0	56	75	101,584	121,306
		新国立劇場中劇場	13	6	0	19		19,722	
2	東京都	東京文化会館大ホール	16	0	14	30	30	69,090	69,090
		東京文化会館小ホール	[2]	0	0	[2]	[32] ^{*2}	[1,298]	[70,388] ^{*3}
3	兵庫県	兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール	12	0	3	15	17 [19] ^{*2}	30,015	31,615 [32,449] ^{*3}
		兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール	2	0	0	2		1,600	
		兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院 小ホール	[2]	0	0	[2]		[834]	
3	東京都	日生劇場	17	0	0	17	17	22,610	22,610
5	愛知県	愛知県芸術劇場大ホール	6	0	4	10	10	25,000	25,000
		愛知県芸術劇場小ホール	[1]	0	0	[1]	[11] ^{*2}	[282]	[25,282] ^{*3}
6	長野県	まつもと市民芸術館主ホール	8	0	1	9	9	16,200	16,200
6	滋賀県	びわ湖ホール大ホール	3	0	0	3	9	5,544	10,368
		びわ湖ホール中ホール	6	0	0	6		4,824	
8	神奈川県	洗足学園音楽大学前田ホール	0	8	0	8	8 [13] ^{*2}	8,912	8,912 [10,204] ^{*3}
		洗足学園音楽大学講堂	0	[2]	0	[2]		[992]	
		洗足学園音楽大学シルバー マウンテン2階	0	[3]	0	[3]		[300]	
9	神奈川県	テアトロ・ジーリオ・ショウワ	4	2	1	7	7 [10] ^{*2}	9,569	9,569 [10,197] ^{*3}
		昭和音楽大学北校舎スタジ オ・リリエ	0	[2]	0	[2]		[528]	
		昭和音楽大学南校舎スタジ オ・ブリオ	[1]	0	0	[1]		[100]	
9	神奈川県	神奈川県民ホール大ホール	7	0	0	7	7	17,066	17,066
		神奈川県民ホール小ホール	[2]	0	0	[2]	[9] ^{*2}	[866]	[17,932] ^{*3}
合計/総上演回数 客席数・総客席数		—	150 [8]	16 [7]	23	189 [15]	189 [204] ^{*2} /505	331,736 [5,200]	331,736 [336,936] ^{*3}

表12-2 2015年の会場別総上演回数（20回以上開催のB.中・小規模会場）

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	上演回数	客席数 ^{*1} (席)	総客席数(席)
1	東京都	渋谷区文化総合センター 大和田さくらホール	6	0	0	6	20	4,374	9,120
		渋谷区文化総合センター 大和田伝承ホール	14	0	0	14		4,746	
1	東京都	町田市民フォーラム・ホール	20	0	0	20	20	3,760	3,760
合計/総上演回数 客席数・総客席数		—	40	0	0	40	40/620	12,880	12,880

*1 各会場の1回あたりの客席数は、オーケストラピット設置の有無、会場の使用形式にかかわらず、最大値とした。例（新国立劇場中劇場1038席/回）

*2 該当する規模の会場の上演回数を合計した。表12-1大規模会場の総上演回数では、中・小規模会場での上演回数を含めた数字を[]内に表した。

*3 該当する規模の会場の客席数を合計した。表12-1大規模会場の総客席数では、中・小規模会場での客席数を含めた数字を[]内に表した。

本格上演しにくいものを演奏会形式で取り上げて、成果を挙げるケースも多い。

「劇場・音楽堂等主催公演のバロック・オペラ」に、特徴のある上演が多かったのが、2015年の特徴である。北とぴあ国際音楽祭は、宮城聡演出、寺神戸亮指揮レ・ボレアード演奏で《妖精の女王》2回を上演、バロック演奏のスペシャリストであるソプラノのエマ・カークビーも出演して声を聞かせた。紀尾井ホール《オリンピアデ》日本初演は、河原忠之指揮で2回上演。コンサートホールでのオペラを、栗国淳が演出し、舞台を作りすぎることなく自然な形で成立させた。いずみホール《魔笛》は、河原忠之の指揮と高岸未朝の演出が、音楽とドラマを、奥行きをもって映し出し、3人の童子を、彌勒忠史、藤木大地、村松稔之のカウンター・テナー3人が演じたのも話題となった。

7. まとめ

日本のオペラ公演は、様々な社会現象や政治、経済、さらには天変地異にも直接の影響

を受けるなどで上演状況が変化していて、それが本稿の数字にも、そのまま現れている。

2011年の東日本大震災以降、減少したままの海外招聘公演の状況は回復傾向がみられず、一方でオペラ団体と劇場・音楽堂等の協力関係は、多様に、さらに複雑になっている。加えて、人もプロダクションも、様々な意味でグローバル化が進む傾向にあるため、国内か国外かといった線を引く作業が、年々難しくなってきた。歌手や指揮者は海外から招聘しているのだが、演出やプロダクション製作は日本で行っているケースなども出てきていて、海外招聘公演に近い、あるいは等しいが、国内団体の公演での分類となるなど、判断に迷うケースが多くなっているのである。だからこそ、1つひとつのオペラ公演を形づくる構造を捉えるために、本稿の分析手法を今後も継続する意義があると言えるだろう。

(本稿のデータ分析後に判明した公演記録があるため、巻末の公演記録と若干の相異点があることをお断り致します。)